群馬県立女子大学紀要　第四十四号別刷（令和五年二月二十八日）

〈資料紹介〉

熊本市・本蔵院における安本亀八の事績について

塩澤寛樹・竹原明理

〈資料紹介〉

熊本市・本蔵院における安本亀八の事績について

塩澤寛樹・竹原明理
（熊本博物館）

はじめに

生人形の制作で知られる安本亀八は、文政九年（一八二六）に熊本迎町（現熊本市中央区迎町）の仏師春蔵（あるいは善蔵）の家に生まれたといい、その後、大阪に出て生人形興行で好評を博し、次いで東京へ上って生人形、菊人形の興行を行い、明治三十三年（一九〇〇）十二月八日に七十五才で没したと伝えられる。

亀八の出身地である熊本市内の本蔵院に、彼の晩年の作である弘法大師坐像が伝存していることが公表されたのは、熊本市現代美術館が二〇〇四年に開催した展覧会の図録『生人形と松本喜三郎』に貼り付けられた写真であった。江戸時代以来の伝統的な弘法大師像の像容に則った本像は、その後特に注目されることもなかったが、竹原が担当し、二〇二〇年十二月から翌年一月にかけて熊本博物館で開催された展覧会「ひとのすがた、いのりのかたち」に出陳され、図録には解説と銘記の紹介がなされた。

筆者らは、二〇二一年十一月に本蔵院を訪れ、弘法大師坐像を再調査する機会に恵まれ、改めて概要を記録した。その際、弘法大師坐像と並び安置される理源大師（聖宝）倚像と神変大菩薩坐像をも確認したところ、像底に亀八による彩色を伝える銘記を見出した。この銘記はこれまで知られていない事績であった。

そこで、本稿はこの新出の銘記を紹介すると共に、概要が詳しく紹介されたことのない弘法大師坐像についても記載し、併せて若干の考察を加えることとする。なお、執筆は「はじめに」、「一」、「四」を塩澤が、「二」、「三」を竹原が担当し、全体を塩澤が調整した。

一、弘法大師坐像

（一）形状

頭部を円頂とする。首に浅く三道をあらわす。左手は膝上で念珠を執り、右手は胸前で腕をねじって掌を前に向けて五鈷杵を執る。顔を正面に向けて、二重框座上の上畳座上で結跏趺坐する。服制は、前あわせの法衣の上に袈裟を懸け、裙を着ける。袈裟は左肩で紐で吊る。上畳正面で裙を前に少し垂らす。

（二）品質・構造

木造（寄木造）。彩色。玉眼嵌入。

彩色により構造の詳細は明らかでないが、頭部、体部に内刳りを施す。頭部は面部に矧ぎ目があるとみられ、内刳りして玉眼を嵌入する。頭部肉身は頭部前面と共木とし、襟に沿って体部に挿し込むかと

みられる。脚部を矧ぐ。両手首先を別材製とし、袖口に挿し込む。像底に底板を貼り、紙貼りの上、彩色する。裙前面の垂下部は別材とみられる。持物は別材。

（三）保存状態

彩色に一部の剥落がみられるが、概ね良好である。

（四）法量（単位：センチメートル）

像　高	三五・二	面　巾	一七・六
頭頂～顎	一一・〇	面　奥	一〇・六
耳　張	九・〇	袖　張	三六・二
肘　張	二四・八		
胸厚（左）	一一・七	胸厚（左）	一一・六
腹　厚	一五・九	膝　奥	二二・〇
坐　奥	二五・七		
台座高	三八・二	台座巾	三七・七
台座奥	二九・九		

（五）銘記・納入品

〈像底面墨書銘〉

奉新彫刻

師

佛子

安本亀八

七十二才翁

現住亮榮代

明治三十年八月

〈上畳裏面墨書銘〉

奉新彫刻

弘法大師尊像

佛師安元亀八（ママ）

七十二才翁

于時明治三十年八月

本蔵院現住亮榮

代

（六）制作年代

明治三十年（一九九七）

（七）伝来

当寺本堂内須弥壇上に安置される。

二、理源大師（聖宝）倚像

（一）形状

頭部を円頂とする。閉口。口元にほうれい線を刻む。額からやや上に頭襟を載せ、両耳上まで紐を下ろし、両耳後ろを通って後頭部で一ヶ所、両耳前を通って顎で一ヶ所、計二ヶ所で結ぶ。左手は膝上で掌を上に向けて独鈷杵を執り、右手は膝上で錫杖を執る。顔を正面に向けて、両脚を踏み下げて岩座に倚坐する。服制は、前あわせの法衣の上に結袈裟を懸け、百衣を着ける。結袈裟は背面で吊り、両肩部分に緑の布を結える。両脚は括袴を着け、草鞋を履く。

（二）品質・構造

木造（寄木造）。紙貼下地・彩色。玉眼嵌入。

彩色により構造の詳細は明らかでないが、頭部、体部に内刳りを施す。頭部は前後矧ぎ（または割矧）とみられ、玉眼を嵌入する。体幹部は前後二材矧ぎとし、その左右に両体側材脚部を矧ぐ。裙前面の垂下部、両袖の垂下部を別に矧ぐ。両手首先を別材製とし、袖口に挿し込む。像底に底板を貼る。頭襟木製部材を紐で結んで着ける（背面の紐は糸状）。草履は木製別材で、足首に紐で結ぶ。草履は釘で上下二ヶ所で留め、紙こよりで板を通し、上の紐と結ぶ。

持物は別材とし、独鈷杵は木製、錫杖は上部銅製とする。

（三）保存状態

左手の第四・五指の第一関節から先欠失し、彩色に一部の剥落がみられるが、概ね良好である。

（四）法量（単位：センチメートル）

像高	二八・四		
頭頂～顎	一〇・一	面巾	六・五
耳張	七・八	面奥	八・二
肘張	二〇・〇	袖張	二四・二
胸奥（中央）	九・四	腹厚	一〇・五
膝奥	一八・三	膝張	二〇・三
足先開	一三・五	足下～頭頂	三七・七
台座高	二〇・二		

（五）銘記・納入品

〈像底面墨書銘〉

奉彩色

佛師

安本亀八

七十二才翁

現住亮榮代

明治三十年八月

（六）制作年代

江戸時代後期、明治三十年（一八九七）彩色修理

（七）伝来

当寺本堂内須弥壇上に安置される。

三、神変大菩薩坐像

（一）形状

長頭巾を被り、後ろの下端を背面に垂らす。閉口。額、目元、口元に皺を刻む。顎鬚をあらわす。左手は膝上で掌を上に向けて経巻を執り、右手は肘を前方に屈臂して胸前で錫杖を執る。顔を正面に向けて、高下駄を履いた左脚は下ろし、右脚は膝を曲げて岩座の座面に置き、岩座上に坐す。右脚の高下駄は岩座の上に別に置く。服制は、前あわせの法衣の上に袈裟を懸け、左肩で吊る。両肩から背面に蓑のような衣を着け、胸前で紐を結ぶ。岩座左側面で袈裟を垂らす。

（二）品質・構造

木造（寄木造）。紙貼下地・彩色。玉眼嵌入。

彩色により頭・体の関係は不明。矧目も不明だが、面部で割矧いで玉眼を嵌入か。体幹部は前後二列に寄せ、前面は中央より左寄りで左右二材、背面は中央で左右二材とする。脚部は中央で左右二材を矧ぐ。両手首先は別材とし、左手首先は袖口で挿込み、右手首先は枘挿しとみられる。高下駄は別材で、太紐で結ぶ。

（三）保存状態

表面に煤汚れが見られるが、概ね良好である。

（四）法量（単位：センチメートル）

像高	三一・〇		
面巾	六・五	面奥	八・八
耳張	九・〇	肘張	一九・四
袖張	二八・一	胸奥（中央）	八・九
腹厚	一〇・〇	膝張	二三・三
膝奥	一七・九	足下～頭頂	四二・六
台座高	二二・五	台座巾	三三・八
台座奥	二五・一		

（五）銘記・納入品

〈像底面墨書銘〉

奉彩色

佛師

安本亀八

現住亮榮代

明治三十年□月

（六）制作年代

江戸時代後期、明治三十年（一八九七）彩色修理

（七）伝来

当寺本堂内須弥壇上に安置される。

四、若干の考察

以上の概要紹介に基づき、補足すべき点や付随して考えられる事柄について、簡潔に述べることとする。

このたびの調査により、安本亀八の明治三十年（一八九七）の事績として、既に知られていた本蔵院の弘法大師坐像造立に加え、新たに二軀の彩色事績を加えることができた。また、弘法大師坐像の銘記についても、若干の修正を加えることができた。この点に、まず基本的意義を認めることができる。

本蔵院の事績はいずれも明治三十年のものであるが、この年は亀八の死没三年前であり、最晩年の事績である。この頃の亀八は東京に居を構えていたが、この年の三月二十九日より故郷熊本の下河原で「日清戦争生人形」の興行を（『九州日日新聞』同年三月二十四日など）、続く八月二十九日から九月二十六日までは福岡で同じ興行を行ったことが知られている（『福岡日日新聞』同年八月二十五日など）。本蔵院の仕事は、これらの興行のために熊本へ帰った折に行われたものと推定される。

弘法大師坐像は形状、構造共に、江戸時代以来の伝統に則って造像されている。亀八は、一八六〇年代の肖像彫刻においても構造面ではほぼ同じ手法を用いている（本号掲載の別稿参照）。本像により、亀八が仏師としての技両、伝統を終生守ったことが明らかとなる。

理源大師像、神変大菩薩像の二軀については、再興として彩色だけ行ったことが判明する。この彩色事績により、亀八は造像において自ら彩色の仕事も行ったことが明らかとなった。中世以降、江戸時代においても、仏像本体の制作は仏師が、彩色は塗師が行うことがしばしばであったが、明治三十年（一八九七）の本蔵院の事績では本体造立と彩色の双方をこなしたことが分かる。

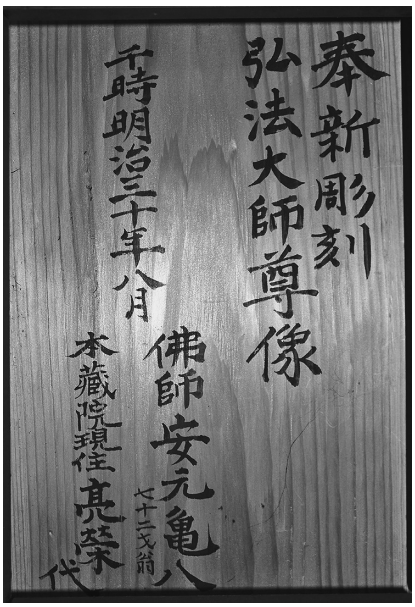
本蔵院の銘記では、制作及び修理の年紀と自らの年齢を記している点も貴重で、これにより、出生に関する確実な史料のない亀八の生年を、文政九年（一八二六）と確定させることが出来る。亀八の基本情報を知る上で意義が大きい。

最後に、肩書きに注目しておきたい。本蔵院の三軀の銘記において、亀八はいずれにも肩書きに「仏師」を用いている。亀八はその初期の事績である奈良県山添村葛尾観音寺十一面観音の修理銘において、「肥後熊本住人　仏師安本亀八光政」と記しているが（『波多野村史』）、生人形興行の際は「生人形細工人」、「細工人」、「生人形師」などを用い、仕事によっては他の肩書きを用いている。彼が場面または仕事に種類に応じて肩書きを使い分けていたことも窺われる。その上で、本蔵院三軀における銘記は、亀八が最晩年においても「仏師」という意識を持って仕事を行ったことが判明する。その点は右記の造像法からも明らかである。彼は終生、仏師でもあった。これを証することができる点にも大きな意義を認めたい。

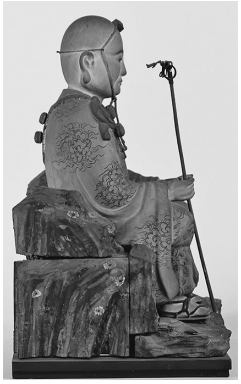
［付記］
本稿を成すに当たり、本蔵院藏本崇史師には調査、撮影にご高配を賜りました。記して深謝申し上げます。
また、本稿に掲載した写真は、熊本博物館の木山貴満氏と坂本直也氏の撮影によるものである。併せて御礼申し上げます。
なお、本稿は塩澤の科学研究費助成事業による基盤研究（C）「中世・近世の肖像彫刻に関する総合的研究」（課題番号18K00165）の成果の一部である。

弘法大師坐像

像底面墨書銘



上畳裏面墨書銘



理源大師（聖宝）倚像

像底面墨書銘

神変大菩薩坐像

像底面墨書銘